

## 臨地実習Ⅱ 報告

本学は専門職大学として、臨地実習に多大な時間を割いている。学生たちは少人数のゼミに分かれ、繊維産業に関連する実習先に向かう。そこで地域の伝統技術を学び、新しいファッション知財を海外に発信することを目標としている。次ページ以降は、3年生を対象に2023年度に新規に実施された臨地実習Ⅱの報告である。継続の臨地実習は下記を参照して欲しい。

### 【東京キャンパス】

- NHK（日本放送協会）、八王子繊維産地：澤井織物工場、藤本染工芸（浅野麻由・梅木典子）
- 墨田区ニット産地：東京ニットファッション工業組合企業（平井秀樹・今村淳）
- 株式会社 OpenFashion 生成 AI Maison AI、横浜中華街 商店会、株式会社大丸松坂屋百貨店 AnotherADdress（酒井聡・杉前陽子）
- 株式会社リコー TRIBUS 推進室「RANGORIE」ブランド（杉田慎一郎・寺戸淳子）
- 尾州産地、丹後山地、久留米山地（宮浦晋哉・篠原航平）

（継続）

ムーンレイカーズテクノロジー株式会社（旧ディプロモード株式会社）（永澤陽一・後藤圭介・村上勝）

上落合発展会（古田祐幸・倉内尚士）

### 【大阪キャンパス】

- 丹後藤織り保存会（金谷美和）
- 有限会社 鷺野染工場（高山遼太）
- 株式会社 コモチキスタイル（藤井輝之）
- 株式会社 ショーワ（高原昌彦）
- 見附商工会（汪奮毅）
- 有限会社 BESTPLAY（藤井輝之）

（継続）

株式会社 the laB. media solution（高山遼太）

ワイ・エム・ピー（高山遼太）

稲坂莫大小製造 株式会社（三木勘也）

妙中パイル織物 株式会社（藤井輝之）

第一メリヤス 株式会社（藤井輝之）

テーラーメイドカントリー（汪奮毅）

株式会社 藤木友禅型製作所（高原昌彦）

松尾捺染 株式会社（高原昌彦）

株式会社 近鉄百貨店 あべのハルカス近鉄本店

(窓口：藤井輝之、汪奮毅、金谷美和、高原昌彦、高山遼太、三木勘也)

**【名古屋キャンパス】**

- 有松鳴海絞、瀬戸焼、岡崎和蠟燭、きしめん、春日井サボテン、三河の反毛、四間道、尾州、名古屋コーチン、西尾市抹茶、清酒・御代櫻他（大島一豊）
- Mネイル（奥村 潔、可児直之：マレーシア引率）

## 【東京キャンパス 報告①】

担当教員	浅野麻由・梅木典子
ゼミ生数	12名
実習先名	NHK、八王子繊維産地：澤井織物工場、藤本染芸
実習先住所	東京
実習期間	【前期】4月1日～6月30日（NHK） 【後期】10月1日～1月29日（八王子繊維産地）

### 【前期】NHK（日本放送協会）との連携

#### 1. 概要

前期の実習では、NHK 第1制作センター（教育・次世代）と連携し、「SDGs」を映像で表現することを試みた。NHKでは、全国の中高生に「私たちの街・学校のSDGs」をテーマにEテレのSDGsテーマソング「ツバメ with YOASOBI」のオリジナルミュージックビデオの制作を募集していた（2023年9月末日〆切）。本ゼミではその見本となるような動画制作に取り組んだ。

#### 2. 連携先の概要

NHK 第1制作センター（教育・次世代）では、国連の加盟国が決めたSDGs（持続可能な開発目標）を学ぶための子ども番組「あおきいろ」を2021年に立ち上げた。

#### 3. 担当実習先を選んだ理由

ファッションを学ぶ学生においてもSDGsを学ぶ必要がある。これまで講義の中でSDGsを学んできたが、実際に自分たちの身近なSDGsとは何かを考え、そしてそれを「映像」で表現する力を養うことを目指してNHKと連携することとした。

#### 4. 実習のスケジュール

4月：指導教員から、EテレのSDGsテーマソング「ツバメ with YOASOBI」のオリジナルミュージックビデオの課題を提示する。

4つのグループに分かれ、それぞれテーマを設けて行う。

5月：映像制作・ゼミ内試写を実施。

6月：NHK職員3名が来校し、試写・コメントを行う。そのコメントに応じて映像を修正し、完全提出。NHKのウェブサイトにて掲載。

#### 5. 実習の内容や最終目標

グループ①：ツバメと描く未来 ～ジェンダー平等を身近な生活から考える～

日本が世界各国に比べて立ち遅れている「ジェンダー平等」に目を向けた。ジェンダーギャップから生じる疑問を改めて見直し、「あって欲しい未来」の映像表現を行った。

グループ②：十人十色

学生たちは、衣装制作などを行うインターン先から廃棄する生地をもらい、それぞれが考えるSDGsファッションを制作した。多様性社会を生きるこれからの時代、お互いを尊重しながら十人十色な自分たちを表現した。

グループ③：群馬県大泉町でこどもたちと手形アートを創ってみた！

学生の故郷である群馬県大泉町における世代や国境を超えた交流を映像にした。大泉町は、日系ブラジル人が多く暮らし、少子高齢化も進む。ツバメの羽をイメージしたマントを作成し、そこにこの街に暮らす人たちの手形を入れることで、共生社会を表現した。

グループ④：ジャガイモの絆

中国からの留学生のグループによる取り組

みである。来日したときの彼らは、全く違う文化や習慣もあれば、似通う部分もあった。その中で、多くの人たちが大好きな「じゃがいも」という食材から、各国のじゃがいも料理の「違い」を紹介し、そしてそれをみんな「同じく」美味しく食べるということを表現した。

## 6. 学生たちの様子



写真1 「ツバメと輝く未来」  
(2022年6月5日浅野撮影)



写真2 「十人十色」  
(2022年6月5日浅野撮影)

## 7. 実習の成果

学生が制作したオリジナルミュージックビデオは、NHKのプロデューサーの審査を受けて、2023年7月から9月末までNHKのウェブサイトで掲載された。

### 【後期】八王子繊維産地との連携

#### 1. 概要

八王子繊維産地は1850年代に横浜港が開港すると、その立地の良さから繁栄し、繊維産業において大きな役割を果たした。しかし、機械による大量生産化が進むとその多くが廃業していった。現在、その中でも、「手仕事」にこだわったモノづくりが行われている。本ゼミでは、職人による「手仕事」を自ら体験・調査し、職人の視点を養うことを第一の目的とする。その調査記録として映像制作を行った。

#### 2. 連携先の概要

八王子市役所と八王子織物工業組合の協力を得て、澤井織物工場の4代目澤井伸氏(72)と藤本工芸の藤本義和氏(87)を実習先とした。澤井織物工場では1100年続く多摩織りの技法をはじめ現代の需要にあった織物を

#### 身近な人たちが登場する動画で表現！

国際ファッション専門職大学のみなさんにご協力いただきました

写真3 NHKのウェブサイトの掲載画面(一部)

出典) NHK ホームページ (<https://www.nhk.or.jp/irotoridori/aokihiro/ncon/> 2023年8月3日閲覧) より

幅広く生産している。また藤本工芸では、これまで着物の染めを行っていたが、生活用品全般の小物まで染めの技法を駆使し、「伝統」を新たな手法によって継承しようとしている。

### 3. 担当実習先を選んだ理由

八王子繊維産地では年々生産量が減少し、繊維産業に関する工場の廃業も進んでいる。しかし、2020年に文化庁によって「日本遺産」に登録されたことで、その伝統を残そうという活動が行政をあげて行われている。現代の大量生産時代に、手仕事が生み出す「良いもの」とは何なのか。職人の想いや技法を調査することで、それを理解した上でのファッションデザイン・ビジネスの着想ができることを目的とする。

### 4. 実習のスケジュール

10月：教室内で事前にレクチャー（八王子繊維産地の概要説明、梅木教員による織物体験や染物体験を実施し、その「難しさ」を事前に知る）

11月：調査・撮影

12月：編集・中間発表

1月：修正・発表

### 5. 実習の内容や最終目標

ゼミ生は以下の2つの班に分かれて、調査を行い映像制作を行った。

【澤井班】手仕事にしかできない「風合い」をどのようにして生み出していくのか。細かい模様がほどこされたテキスタイルでは、プリントではないかと間違えるほどの細かい織りがされている。到底機械ではこの織りはできない。伝統工芸士として活躍する澤井氏は、意外なほど、過去ではなく現代に目を向けていた。Google社からニットをタッチパネル化できないかという依頼があれば喜んで引き受ける。伝統とは、時代に合わせてその技を生かしていくものである。

【藤本班】藤本氏は、江戸小紋の染物を60年以上行ってきた職人である。着物の生産が減少化するなかで、伝統を守るとは何かを考えた。それは、誰もがその技を使えるようにすることで色いろな物に転用させることだという。藤本氏が誰もができる染技法として、江戸時代から続く「型染」を学生に体験させた。また学生たちは藤本氏のサンプルのテキスタイルや端布を使って、現代的ファッションの制作を行った。

### 6. 学生たちの様子



写真4 藤本氏の指導で「型染」を体験  
(2023年10月25日浅野撮影)



写真5 藤本氏のテキスタイルで制作したファッション  
(2023年11月学生撮影)



写真6 澤井氏による伝統技法「多摩織り」  
(2023年11月学生撮影)

## 7. 実習の成果

産地で織物職人の澤井氏や染職人の藤本氏へのインタビュー調査や技を撮影していくなかで、学生たちは主に2つの気づきがあったと言う。

第1に、「伝統とは何か」の気づきである。学生たちは形式を崩さずに技法を守り続けることと考えていた。しかし両職人への調査から、次世代に伝統技法を残すということは、時代の需要に合わせて柔軟に変化させていく

ことだという新たな理解を得た。

第2に、映像表現のファーストステップを踏むことができた。映像制作に初めて取り組む学生が多く、数分単位の物語性のある映像表現を行うことが非常に難しかったという。しかし映像制作は、具体的な問いや狙い(視点)を明確に持つ必要があり、今後論文やポートフォリオの作成の際に生かすための訓練にもなった。

## 【東京キャンパス 報告②】

担当教員	平井秀樹・今村淳
ゼミ生数	11名
実習先名	墨田区ニット産地：東京ニットファッション工業組合企業
実習先住所	台東区皮革産地：富田興業株式会社、株式会社キヨモト他 ニット：東京都墨田区両国 4-37-2 他 皮革：東京都台東区今戸 1-3-12 他
実習期間	2023年4月19日～2024年1月31日

### 1 東京都墨田区ニット産地における取り組み

本ゼミでは、2つの柱で活動を展開した。まず第1は、東京都墨田区のニット産地での活動である。東京ニットファッション工業組合を窓口とした理由は、墨田区は東京都内で古くからのメリヤスの産地で、台東区の皮革産地と並び、都内で現存している数少ない産地と呼び得る産業集積区地域だからである。

はじめに、墨田区ニット産地での活動を端的に紹介する。10月2日に本学にてオリエンテーションを実施。内容は墨田区ニットの学

習上で必須となる、産地の歴史と現状についてである。さらにニットの基礎知識について、組合事務局長代行の前田雅行氏、伊東敏明副理事長、加々村征青年部部长から講義を受けた後、学生と積極的なディスカッションを展開した(写真1)。

基礎知識が備わったところで、10月10日に墨田区内のニット関連企業への訪問・見学を実施した(写真2、3)。訪問企業一覧は表1の通りである。

その後、10月23日のゼミにおいて組合



写真1 ニットの基礎知識についての講義の様子(2023年10月2日平井撮影)

企業の取材に関するレクチャーを本学で実施した。取材の流れからホームページ制作のポイント、動画編集の基礎知識について、株式

会社 Soichiro の扇塚宇明氏から講義を受けた（写真4）。

全体の流れが頭に入ったところで、10月

表1 墨田区内のニット関連企業の訪問先一覧（平井作成）

訪問企業①	<p>有限会社アートランド：職人による手捺染の加工をはじめインクジェットプリント等、さまざまな加工技術を得意としているほか、オリジナルTシャツなども生産・販売している企業（プリント加工）</p> <p>&lt;東京都墨田区横川 3-11-5 TEL：03-3626-5021 &gt;</p>
訪問企業②	<p>株式会社川合染工場：独自の染色技術（あずま炊き）を活用した反物およびニットの製品染めをメインにしながら、オリジナル製品も研究開発している企業（染色加工）</p> <p>&lt;東京都墨田区向島 4-24-8 TEL：03-3623-6176 &gt;</p>
訪問企業③	<p>株式会社川島メリヤス製造所：著名なコレクションブランドからの発注が絶えず、モヘア起毛の生産加工が外注で間に合わないことから、自社内に起毛加工機を取りそろえた勢いのあるセーター企業</p> <p>&lt;東京都墨田区向島 3-9-8 TEL：03-3622-6350 &gt;</p>
訪問企業④	<p>中橋莫大小株式会社：ニット製ルームシューズ・スリッパを独自に開発し、国内およびフランス等、欧米の消費者から支持されている企業</p> <p>&lt;東京都墨田区亀沢 2-14-3 TEL：03-3625-4505 &gt;</p>
訪問企業⑤	<p>丸和繊維工業株式会社：独自の特許技術を活用したオリジナルニット製品および著名デザイナー、著名企業とのコラボ商品等、幅広く事業を展開している企業（丸編カットソー）</p> <p>&lt;東京都墨田区亀沢 1-8-6 TEL：03-3624-6611 &gt;</p>
訪問企業⑥	<p>伊東メリヤス工業株式会社：オリジナルのニットジャケット、カットソーを製造販売している企業</p> <p>&lt;東京都墨田区石原 2-3-10 TEL：03-3623-1158 &gt;</p>



写真2 有限会社アートランドにて。職人による手捺染の様子（2023年10月10日平井撮影）



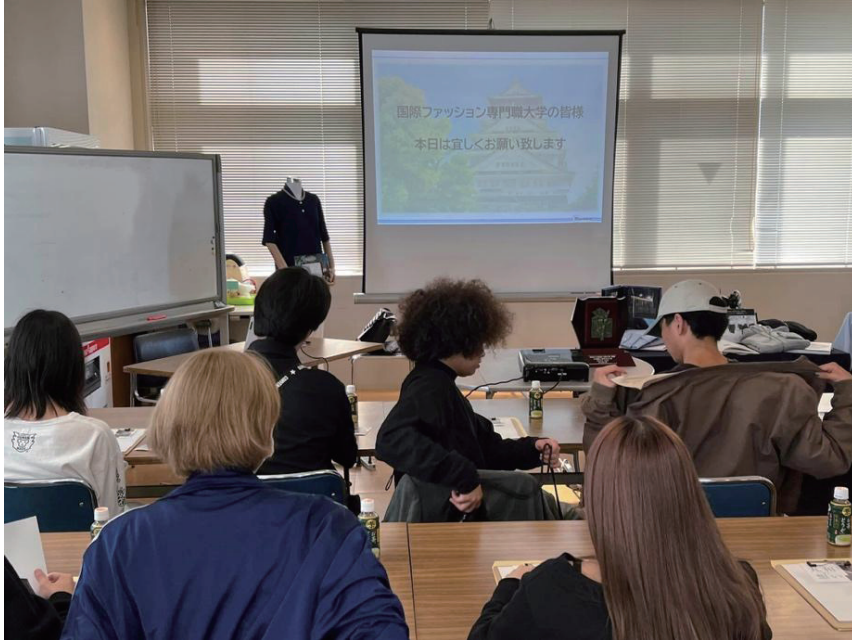


写真3 丸和繊維工業株式会社にて。動体裁断などの講義の様子（2023年10月10日平井撮影）



写真4 取材とホームページの制作に関する講義の様子（2023年10月23日平井撮影）

31日から取材活動を開始した。2023年度の取材先は表2の通りである。成果は東京ニットファッション工業組合のホームページで順次公開予定である。

## 2 東京都台東区皮革産地における取り組み

第2の柱は、東京都台東区の皮革産地を舞台にした、産学連携プロジェクトである。今戸を中心とした奥浅草地域は、軍靴から発

表2 2023年度の取材先一覧（平井作成）

NO	2023年（取材先）	業種	住所	取材チーム	取材日
1	株式会社ズーム	カットソー	東京都墨田区緑 2-13-20	A チーム	10月31日
2	株式会社谷繊維	カットソー	東京都江戸川区中央 3-7-2	B チーム	10月31日
3	有限会社オフィスホドタ	カットソー	東京都墨田区横網 1-12-28	C チーム	10月31日
4	株式会社内田染工場	染色	東京都文京区白山 3-5-2 ローズハイム	A チーム	12月5日
5	百瀬繊維株式会社	カットソー	東京都墨田区江東橋 5-14-20	B チーム	12月5日
6	株式会社アシダニット	カットソー	東京都墨田区緑 3-20-4	C チーム	12月5日

展した古くからの皮革産地として有名である。取り組みに至った理由は、D級レザーと呼ばれる傷や虫食い、血筋などのナチュラルマークが目立つレザーがなかなか使用されず在庫として残ってしまっている状況を知ったことで、この皮革産業の問題を産学で解決することが目的である。

「レッザレジリエンスプロジェクト」と命名された本プロジェクトは今期で3期目に入る。ゼミ生から候補を募り、今年度は6人が参加して4月から活動がスタートした。今期は富田興業株式会社、株式会社キヨモト、そして本学の3社間産学協定のかたちをとり、レザーソムリエ基礎講座への参加、埼玉県のタンナー（製革業者）の見学を経て、市場リサーチ、アイデア探索、コンセプトメイ

キング、プロトタイピング（試作品の制作）、展示会までを行った。

革にアルミニウムを挟み込んだ素材をゼミ生のアイデアで開発し、その変幻自在にかたちが変化する革を使ってサコッシュを制作。「大人のサコッシュ」として株式会社キヨモトの展示会で公開したところ、プロのバイヤーからの評価もおおむね好評であった（写真5）。

2年生の時に教室で学んだ製品開発やビジネスモデルの理論を、3年生の臨地実習で実際に業界が抱える課題と結びつけ、実在する企業を舞台に課題解決していく実践的な学びの機会を得られたことは、まさに本学ならではの強みであり、ゼミ生たちにとっても貴重な経験／成果となったはずである。



写真5 開発したサコッシュに満足げなゼミ生の山田君（左）と開発ミーティングの風景（右）  
（2023年10月18、11月8日 平井撮影）

## 【東京キャンパス 報告③】

担当教員	酒井聡・杉前陽子
ゼミ生数	19名
実習先名	株式会社 OpenFashion 生成 AI Maison AI、横浜中華街 商店会、株式
実習先住所	会社大丸松坂屋百貨店 AnotherAddress
実習期間	2023年7月1日～2024年2月8日

### ◆実習先 1: 株式会社 OpenFashion

- ・会社概要: アパレル大手ワールドのグループ会社。生成 AI に特化したファッションのサービスを開発・提供している。
- ・担当実習先を選んだ理由: 現在テクノロジー領域で最もホットな生成 AI に事業ドメインを持つ OpenFashion 社から、生成 AI 活用のノウハウを学ぶため。
- ・実習のスケジュール: 2023年12月1日～2024年2月8日
- ・実習の内容や最終目標: OpenFashion 社が提供する Maison AI を活用し、また OpenFashion 社が開催するデザインコンペへの参加を通して、ポートフォリオに載せられる作品制作をしながら文章生成や画像生成に熟達する。
- ・学生たちの様子: 思うようなデザイン生成ができなかったり、想像以上のアウトプットができたりと、試行錯誤しながらも AI の特性を学び、習熟していった。
- ・実習の成果: 作品制作とコンテストへの応募。ゼミ期間中に入賞者を出したい。

### ◆実習先 2: 横浜中華街 商店会

- ・会社概要: 横浜中華街の街全体に関わる意思決定や取り組みをするための商店会。
- ・担当実習先を選んだ理由: 文化を生み出す「街」というスケールで企画を考える機会を学生に提供するため。
- ・実習のスケジュール: 2023年7月1日～2023年11月30日
- ・実習の内容や最終目標: 横浜中華街商店会

理事で、ロウロウジャパンという SPA ブランドを展開する石河陽一郎氏に、横浜中華街商店会が取り組んでいることや、課題に感じていることを共有いただき、その課題を解決するための企画を立ててプレゼンし、石河氏からフィードバックをいただく。

・学生たちの様子: グループによるが、例えば中華の料理教室を通して中華街のファンを増やす企画を立てたチームは、実際に料理教室にリサーチに行ったり、自ら料理教室を開催してみたりと、企画の実現性を検証するためのアクションをおこし、仮説検証を実践していた。

・実習の成果: 「街というスケールで企画を考える」経験を積むことができた。

### ◆実習先 3: 株式会社大丸松坂屋百貨店 AnotherAddress

- ・会社概要: デザイナーズブランドの服を借り放題という「AnotherAddress」を運営。
- ・担当実習先を選んだ理由: 現在急成長中のサービスであり、マーケティングから物流まで幅広い観点で学びながら企画に取り組みするため。
- ・実習のスケジュール: 2023年7月1日～2023年11月30日
- ・実習の内容や最終目標: AnotherAddress 責任者の田端竜也氏にサービスの説明、物流拠点の案内、課題提起をいただき、グループごとに学生が企画を考え、プレゼンし、フィードバックをいただく。AnotherAddress が新規顧客を獲得していくに当たって、リーチを

増やすこと、リーチした層が有料ユーザーに転換する割合を高めることが主な課題にあげられた。

・学生たちの様子：企画のプレゼンをして終わるのではなく、チームによっては受けたフィードバックに基づいて企画にブラッシュアップをかけ、再提案をさせた。実際のビジネスに近い経験を積むことで、モチベーションを高めた学生もいた。学生向けのリーズナブルなエントリープランを作成する企画、学生に人気のブランドの取り扱いを増やす企

画、着こなしを解説する記事コンテンツによって検索エンジン経由の獲得をしながら既存顧客にファッションを学ぶ機会を提供する企画などが提案された。

・実習の成果：1グループの案が採択され、2024年1月から実際に共同企画が始まっている。学生は業務委託というかたちで、アルバイトより専門性も時給も高い仕事をしながら、サービス内で利用されるコンテンツを、取材や生成AIを活用して生み出していくことになった。

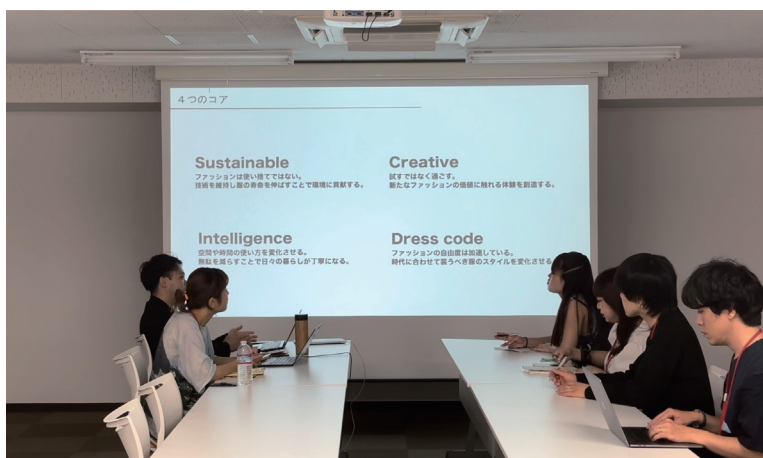


写真1 AnotherAddressのサービス構造や思想、課題に関する特別講義（2023年6月21日 酒井撮影）



写真2 レンタルサービスを実現するためのAnotherAddressの物流拠点（2023年6月21日 酒井撮影）

## 【東京キャンパス 報告④】

担当教員	杉田慎一郎・寺戸淳子
ゼミ生数	17名
実習先名	株式会社リコー TRIBUS 推進室「RANGORIE」ブランド
実習先住所	東京都大田区中馬込 1-3-6
実習期間	2023年10月1日～2024年3月31日

株式会社リコーの創業者である市村清は「人を愛し、国を愛し、勤めを愛す」の三愛主義をベースに社会に資する事業を起こすという精神で、事務機器メーカーのリコーをはじめ、ガソリンスタンドの株式会社三愛石油、小売店舗を統括する株式会社西銀座デパート、水着の株式会社三愛、明治神宮記念会館などの運営事業を行ってきた。今回の実習先となる「RANGORIE（ランゴリー）」ブランドは、経済産業省の2010年BOPプロジェクトの具体策として、リコーの副業促進制度から2019年に生まれたブランドである（写真1～5）。そこではインド農村部の女性に仕事を創出することを目指し、インドの伝統柄をあしらったエスニックウェアを生産販売している。当初はインドの女性に働く場を提供すべく、生産から販売までをインドで計画していたが、コロナ禍によって販売を日本で行うところからスタートした。この社会的な意義のあるブランドに対して本ゼミからサポートをさせていただくことを依頼し、快諾を得たことによって今回の実習は始まった。

### 1 実習のスケジュールと内容

実習のスケジュールは事前調査（2023年10月）、訪問調査（2023年10月）、課題の抽出（2023年11～12月）、解決策の提案（2024年2月）の4段階である。

事前調査の段階では、①株式会社リコーの会社概要の整理、②副業制度に対する課題の抽出、③RANGORIEの顧客分析、CRM分析、商品分析、競合分析を行い訪問調査に向かった。

訪問調査は2つの柱から成る。まず1つ目は、RANGORIEに対する理解を深めることと事前調査で浮かんだ疑問点に対する意見交換である。2つ目は、このブランドを生み出すに至ったリコー TRIBUS 推進室での副業制度の概要と選考方法、そして、それに伴うサポート体制である。「なぜ、理系の会社がアパレルブランドを手掛けるのか」「理系の会社の中でしかも副業制度でアパレルを運営する経営資源にはどのようなものがあるのか」といった疑問を中心に意見交換をさせていただいた。

課題の抽出では、競合他社との比較から商品提案、CR体制、商品企画に至るまでさまざまな意見が出てきた。特にリコーの特許と連携した提案など、ゼミ生それぞれの提案内容がまとまってきた。今後はこれらの提案をまとめRANGORIE側と意見交換を行う。

### 2 実習の様子と成果

RANGORIEでの学びは主に2つあると思われる。1つは、ブランドの立ち上げ期におけるさまざまな困難な状況をいかに克服するかである。特に生産面では、既存の縫製工場に注文するのではなく、自社で工場運営から行なっているのが大きな特徴である。日本の縫製工場でリコーの社員が縫製技術を学び、交通の不便なインドの農村部で工場を立ち上げ、初心者の方に縫製技術を習得させているという。生産現場の構築という、まさにものづくりの原点から試行錯誤していると言っ

てよいだろう。また、コロナ禍で当初の計画

が大幅に変更を余儀なくされている中でも、このプロジェクトに賛同してクラウドファンディングに参加してくれる方々が多数おり、社会的な意義のある事業内容ということでNHKに2度も取り上げられるなど、着実に注目を集め顧客層を増やしていく様は学生一同胸を打たれた。

もう1つの学びは、副業制度を使った取り組みということである。社会に資する事業を作っていくという創業時の三愛精神をベース

に、リコー本社の副業制度は実施されている。その内容は自社の経営範囲にとどまらず、社会に貢献する事業という大きな視野を持っており、なかでも特筆すべきは、プロジェクト推進に対する充実したサポート体制である。プロジェクトごとに選考段階の時点でその道の専門家が社外からノミネートされ、自社では思いつかないような点までサポートされていること、また、人員を送り出すリコー側では、本業との調整をいかにスムーズに進めていくかを細かく後押ししている。本業が多忙になり副業になかなか時間を割けないといった際も、TRIBUS推進室が間に入って副業に時間を取りやすいようサポートがなされていた。

これらの事例からブランドを立ち上げるときの苦労はもちろん、副業制度を使った場合の限られた時間の中で、どのように本業との調整をおこなってきたかといった生の声を伺うことで、学生にとっては大きな学びとなったと思われる。



写真1 リコー副業制度による商品事例  
(2023年10月23日杉田撮影)



写真2 リコー副業制度の説明  
(2023年10月23日杉田撮影)



写真4 RANGORIE 商品サンプル  
(2023年10月23日杉田撮影)



写真3 RANGORIE 店舗内  
(2023年10月23日杉田撮影)



写真5 RANGORIE 店舗前にて  
(2023年10月23日杉田撮影)

## 【東京キャンパス 報告⑤】

担当教員	宮浦晋哉・篠原航平
ゼミ生数	13名（尾州産地班5名、丹後産地班4名、久留米産地班4名）
実習先名	・尾州産地 主要取り組み先：三星毛糸株式会社、山栄毛織株式会社 ・丹後産地 主要取り組み先：宮眞株式会社 ・久留米産地 主要取り組み先：有限会社坂田織物
実習先住所	三星毛糸株式会社：岐阜県羽島市正木町不破一色字堤外 898 山栄毛織株式会社：愛知県津島市百町字下住吉 4 宮眞株式会社：京都府与謝郡岩滝町字岩滝 1166 有限会社坂田織物：福岡県八女郡広川町長延 602

### 1 主要取り組み先会社概要

#### 尾州産地

・三星毛糸株式会社：1887年創業の尾州産地の老舗企業である。2012年にPremiere Vision Parisへ出展し、2015年にはErmenegildo ZegnaのMade in Japan Collectionに選出された。メゾンブランドにもテキスタイルが採用される有力メーカーで、日本国内のテキスタイルを競う「ジャパン・テキスタイル・コンテスト」でのグランプリ経験もある。カシミアやシルク、ウール、モヘア等の原料の魅力を引き立てるテキスタイル開発が強みである。

・山栄毛織株式会社：1915年創業。世界初の「ブラックフォーマル」を製織し、作り出すテキスタイルはメゾンブランドをはじめ、国内外で高い評価を獲得している。獣毛系の独自の原料選定、組織設計、ワンストップでの自社製織が強みである。レピア織機<sup>1)</sup>の回転数を限界まで下げることで、糸に負荷をかけず空気をはらむように織ることができ、ふんわりした独特のテキスタイルが生まれる。

#### 丹後産地

・宮眞株式会社：丹後は絹織物の産地として

1300年に渡る歴史を持つ。丹後産地の強みである強撚技術を活かしたテキスタイルを武器に、ヨーロッパのさまざまなメゾンブランドにも生地を納めている。和紙や天然素材との交織も多彩で、2007年から海外展示会にも参加している。

#### 久留米産地

・有限会社坂田織物：久留米緋という和服用の織物を製造するメーカーで、伝統的な幾何学模様や藍染めの手法を伝承している。小幅と呼ばれる着物用の幅の狭い仕上がりが特徴である。現代表が中心となって斬新な柄を生み出し、自社ブランドではNYにも販路を持つ。自社で糸染めと久留米緋に必要な特殊糸加工を担い、一貫生産を行う。久留米緋の未来を担うメーカーで、伝統的な久留米緋では使われなかった素材や糸使いにも挑戦する。

### 2 担当実習先を選んだ理由

担当教員が提示した9つの繊維産地の中の16企業から参加学生に3つの産地を選んでもらった。本年度から始まった新しいゼミであり、参加学生に主体的に取り組んで欲しいという意図の下、教員が実習先を決めるの

ではなく、学生に選定してもらい、という方法を採用した。

### 3 実習のスケジュール

【尾州産地での全体研修（2023年10月11日～10月13日）】

参加学生：尾州産地班 5名、丹後産地班 4名、  
久留米産地班 4名

実習先：トヨタ産業技術記念館、一宮地場産業ファッションデザインセンター、テキスタイルマテリアルセンター、中伝毛織、新見本工場、木玉毛織

【尾州産地研修1（2023年11月8日～11月10日）】

参加学生：尾州産地班 5名

実習先：匠染色、藤井整絨、三星毛糸、山栄毛織

【尾州産地研修2（2023年12月6日～12月8日）】

参加学生：尾州産地班 5名

実習先：三星毛糸、ソトー、葛利毛織、東和毛織、山栄毛織、タキヒョー

【丹後産地研修（2023年11月20日～11月24日）】

参加学生：丹後産地班 4名

実習先：与謝野町役場、宮眞、田勇機業、丹後中央加工場、創作工房糸あそび、タイヨウネクタイ、加地織物

【久留米産地研修（2023年11月20日～11月25日）】

参加学生：久留米産地班 4名

実習先：Orige、坂田織物、広川町役場、久留米緋広川町協同組合、野村織物、Kibiru、山村健氏

### 4 実習の目標と内容

目標は、日本の繊維産地で産出されるテキスタイルの価値を理解し、海外発信する方法を学ぶことである。繊維産地での実習を経て（上記のプログラム以外にも、ハタオリマチフェスティバル2023(2023年10月21日)、JFW JAPAN CREATION/Premium Textile Japan (2023年10月31日)、日本遺産フェスティバル in 桑都・八王子 (2023年11月5日)でも日帰りの実習を実施)、2024年2月6日～2月7日にフランス婦人プレタポルテ協会等に3産地の主要取り組み先企業と連携してテキスタイルのプレゼンテーションを行う。

実習は次の5項目の目標に沿って上記のスケジュールで進めていった。

- ① 技術の体験
- ② 産地の歴史的背景に関する学習
- ③ 産地の現状に関する学習
- ④ 産地の課題に関する学習
- ⑤ 産地の外部との関係に関する学習

### 5 学生たちの様子

元々選択希望制のゼミであるため、繊維産地やテキスタイルに対して高いモチベーションを持つ13名の学生が集まった。ただし繊維工業関連の企業が少ない東京においては、大半の学生が製造現場を見たことがなかった。そのため、3年生前期までの教室内の学習と、実習で目にする実際のテキスタイルの製造プロセスが上手くつながらず、実習開始直後はとまどいが見られた。しかし間もなく活発かつ的を射た質問が出始め、現場をつぶさに観察し、真剣に説明に聞き入る学生たちの姿勢から、これまでの学びが実習と上手く結びつき始めたことを、教員としても実感することができた。

### 6 実習の成果

学生は三星毛糸株式会社、山栄毛織株式会社、宮眞株式会社、有限会社坂田織物と連携



して、2024年2月に海外の企業に対してテキスタイルのプレゼンテーションを行った。その準備のため、実習の後半では学生の視点から4社のテキスタイルの価値を考え、各社の経営者らとテキスタイルや展示物の選定を行った。その後4社と共に海外の企業等(日本の企業もあり)にそれらのプレゼンテーションを行い、講評してもらった。この一連の過程は、正に繊維工業に従事する企業や商社の営業のプロセスであり、それを就職活動

を控えた3年時に、実習を通して疑似体験することができる点が学生にとっての大きな経験と成果であると考えている。実習を経て、一部の学生は就職先として繊維工業関連の企業を視野に入れている。

#### <注>

1) レピア織機：シャトルを使用せずに緯糸を運ぶ無杼織機（むひしょっき）（革新織機）で、剣（レピア）と呼ばれるものが緯糸を運ぶ。



写真1 尾州全体研修の様子（2023年10月13日篠原撮影）



写真2 プレゼン終了後の学生の挨拶（2024年2月6日篠原撮影）

## 【大阪キャンパス 報告①】

担当教員	金谷美和
ゼミ生数	4名
実習先名	丹後藤織り保存会
実習先住所	京都府宮津市
実習期間	2023年5月19日～2024年2月7日

### 1 実習の目的と実習先

本実習のテーマは、日本の知財の発見とファッション産業への接続である。日本各地の繊維素材や染織技術の魅力を見出し、産地と連携し、SDGsに配慮したファッション知財として海外に発信するために、その魅力を伝えるための手法を習得することを到達目標とした。また、東京の篠原航平先生・宮浦晋哉先生のゼミと展示・プレゼンを合同で行うことが企画され、互いに情報を共有しながら実習をすすめた。

目的に沿った実習先として、丹後藤織り保存会（以降、保存会と記す）を設定した。藤織りとは、蔓性植物である藤の樹皮の繊維を糸にして用いた織物である。内皮の靱皮繊維を素材としてつくられる布には、草皮布と樹皮布があり、藤布は樹皮布である。

藤布は、万葉集にも記されている日本古来の織物であり、木綿が日常着として使用されるようになる以前には日本各地で製作、使用された。近年、藤布をふくむ草皮布・樹皮布は「自然布」として関心が高まっている。

丹後藤織りは京都府無形民俗文化財に指定されており、保存会は、この無形民俗文化財の伝承をおこなう団体として京都府宮津市上世屋で1989年に設立され、藤織りの伝承をおこなってきた。学生たちは、地域に伝承されてきた文化財としての価値のある藤織りについて、文化、社会背景を含めて学び、藤布の魅力を、いかにしてラグジュアリーな製品として提案するかを考察した。

### 2 実習のスケジュールと内容

実習は、以下の文献調査、現地調査、博物館調査、データ整理と展示・プレゼン資料の作成という4つの内容に沿っておこなった。

#### 2.1 文献調査

現地調査に行く前に丹後藤織りとラグジュアリーファッションに関する文献調査をおこなった。2回目と3回目の調査のあいだには、どのような文献を読むべきか学生たちに議論をさせ、学生の希望から国内外の自然布に関する文献を選択し、文献調査をおこなった。

#### 2.2 現地調査

現地調査は、5月、6月、11月にそれぞれ2泊3日のフィールドワークをおこなった。1回目は5月19日～21日、2回目は6月16日～18日、3回目は11月17日～19日である。この日程になったのは、保存会の活動日に合わせたためである。保存会の主な活動は、講習会において受講生に技術を伝承することである。学生たちは講習会を手伝いながら藤織りの技術伝承の現場を見学した。さらに、講習会の前後に藤織りの制作を体験した。山にはいって野生の藤蔓を切り、皮をはぎ、木灰で4時間たきあげ、川にはいってそれを洗った。さらに、取り出した藤の繊維を績みつなぎ、糸車で撚りをかけて糸にし、最後に卓上機を使ってコースターを織りあげた。作業に用いるタケの道具も制作した。また、保存会顧問から上世屋という地域のことや藤織りに関する講義をうけ、会長にイン

タビューをおこなった。

### 2.3 博物館調査

大阪日本民芸館で開催されていた「喜如嘉の芭蕉布」展を見学し、学芸員の講義をうけた。また、京都府立丹後郷土資料館において藤織りの展示を見学した。それらによって、芭蕉布と藤布について学び、展示方法についてもアイデアを得た。

### 2.4 データ整理と展示・プレゼン資料の作成

現地調査で得た資料やデータの整理を行い、発表の準備をおこなった。発表の準備過程で、篠原先生・宮浦先生のゼミと合同でオンラインゼミをおこなった。展示は大阪キャンパス内で1月30日に、東京キャンパスでは国内外のファッション関係者むけに展示と英語でのプレゼンが2月6日～7日に実施された。

## 3 実習における学生たちの様子と成果

上世屋は標高400メートルにある山村で、過疎高齢化の集落である。一番近い売店まで車で細い山道を30分以上かけて降りなければならぬ隔絶された環境において、学生たちは、古民家に泊まり、自炊をしながら調査をおこなった。公共交通手段がないこと、保存会から教員の引率が求められたことから、

現地調査の全行程に金谷が帯同した。

幸い、学生たちの手伝いは、保存会の方たちに喜んでいただけた。作業場所や川の掃除、朝5時からの火の番など人手が必要なところは積極的にこなった。3回目の現地調査では、「収穫祭」という保存会の恒例の小さなイベントがあり、そこで卓上機の機織りのデモンストレーションをおこない、若い人が盛り上げてくれたと喜んでいただけた。上世屋には「合力」という労働を手助けしあう慣習がある。学生たちは、保存会の手伝いをすることで、藤織りの技術を学ぶという「合力」を体験することができた。

また、会長をはじめ保存会メンバーの藤織りの伝承に対する想いを、学生たちは真摯に受け止めたようで、ファッション関係者への展示・プレゼンのテーマにも、それが反映されている。

藤織りのすべての工程を体験したこと、コースターという小さいものであっても自分で作った藤糸で布を織りあげたこと、藤布の衣装を試着したり、製品に触ったりしたことなどの体験が、テキスタイルとしての藤布の理解を深めることにつながった。藤織りの製作工程は、力仕事が多く、難しい技術もあり、必ずしも易しいことではなかったが、学生たちはよく動き、しっかりと取り組めた。彼らが、藤織りの技術を学んだだけでなく、伝承の現場に臨むことができたことに教育効果が



写真1 藤布でつくられた服を試着  
(2023年5月19日金谷撮影)



写真2 山にはいって野生の藤蔓を伐る  
(2023年5月20日金谷撮影)

あったと思う。

上世屋という美しい集落で季節のめぐりを感じながら、自然の恵みを受けた布を作るという体験を学生たちができたことに感謝する

とともに、何よりも学生たちを快く受け入れ、ご指導いただいた保存会のすべての方に感謝を申し上げたい。



写真3 藤の皮をはぐ（2023年5月21日金谷撮影）

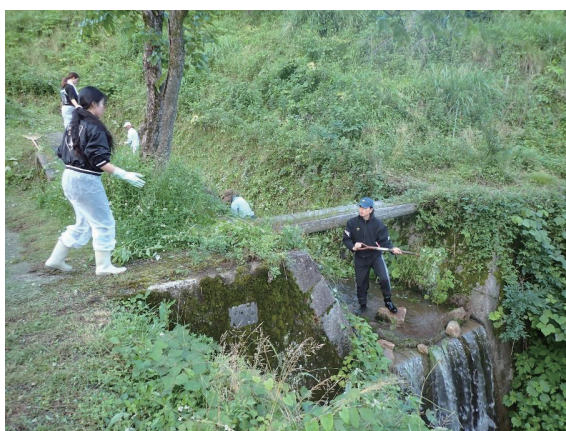


写真4 川の掃除を手伝った。この川で藤の繊維を洗う（2023年6月17日金谷撮影）



写真5 卓上機を使って、藤糸を織る（2023年11月18日金谷撮影）

## 【大阪キャンパス 報告②】

担当教員	高山遼太
ゼミ生数	2名
実習先名	有限会社 <small>わしの</small> 鷺野染工場
実習先住所	京都府京都市左京区一乗寺大新開町 43
実習期間	2023年6月5日～11月16日

### 1 実習先の概要と選んだ理由

鷺野染工場は、昭和5年に初代鷺野匡純氏が京都一乗寺に設立した染工場である。設立後、戦争の影響を受け休業を余儀なくされたが、2代目鷺野勝美氏の手で再建された。現在の代表 鷺野城克一氏は3代目となる<sup>1)</sup>。

同社の主軸事業は、雨傘、洋服、水着、靴等の生地への手捺染プリントである。創業以来、手作業でしか表現できない高品質製品の制作を主とし、デジタルプリントが主流の現在においても、機械を使用しない手作りの強みを活かしたものづくりを行っている。手捺染は色糊（染料と糊を混ぜたもの）とスキージ（先がゴムへらになった道具）を使用し、スクリーン型を移動させながら一色一色染める技法で、職人ならではの力加減や精密な柄表現による色の深みを特徴とする。

2代目までは企業から依頼された生地染めが主であったが、3代目からはオリジナルプリントの開発や販売も展開している。また、繊維業界の未来に向けても自ら発信もされている<sup>2)</sup>。

今回、実習先として同社を選んだきっかけは、2022年に開催された「あべのハルカス学園祭」での鷺野氏との出会いに遡る。筆者（高山）は、その前年に担当していた実習先の展示場に居たとき、ブースの前をたまたま通りすぎた鷺野氏と言葉を交わした。本学が、様々な産地と協業をし、外に向けて発信していること、学生ならではの発想を込めた作品を形にして発表していること、ビジネス学習のカリキュラムを製品ベースで組んでい

ること、などのことをお話しすると、大変に興味を持ってくださった。この出会いを契機に鷺野氏と意見交換を続け、同氏のものづくりへのこだわりと情熱、試行錯誤のご経験を詳しく知るようになった。産業における今後の発展への展望についてのご高見を伺うことができ、また産学連携にも意欲的であることから、本取り組みを進める流れとなった。

### 2 実習のスケジュールと内容

実習は、2023年6月5日（月）～6月16日（金）のうちの10日間（前半）と11月13日～24日までの間の10日間（後半）の2回行った。内容は以下の通りである。

前半では手捺染の基本的な知識・作業・工程の流れの把握を行った。

実習前半では、オリジナルプリント制作に向けた実作業の体験、染め後の生地整理工程・縫製工場等を見学した。その後、6月の実習を通して身に付けた知識を基に、オリジナル柄配色の決定と土台の生地決定にも挑戦したり、染料に使う糊づくりの補助や、同社のSNS用の写真の撮影補助等もお手伝いさせていただいた。

鷺野染工場では、手捺染の工程はプリント柄の型の企画・制作→捺染→蒸し→洗いという一連の作業を、各専門の業者とのリレー形式で行っており、学生たちはこれらの工程一つひとつの詳細を、鷺野氏から詳しく説明してもらっていた。

実習中は、工場の作業研修が主である。鷺野染工場は、染め作業を鷺野氏すべての工程



写真1 作業場 (2023年6月5日学生撮影)



写真2 手捺染体験 (2023年6月5日学生撮影)



写真3 オリジナル柄配色検討の様子  
(2023年6月15日学生撮影)

を一人で行っている。そのため、綿・麻・ポリエステル等それぞれの素材に対しての染料・糊の配合等、職人技が光る工程を丁寧に指導いただいた。

また、手捺染の工程を機械化した「オート捺染」、絵柄の型が彫られたローラーに捺染のりをのせ、回しながら生地に染着させる「ローラー捺染」、デジタルデータを作成し、機械のヘッドから染料を吹き付け定着させる「インクジェットプリント」など、手捺染以外のプリント工場や技法についても知識を深めることができたと学生からも報告があった。

### 3 実習の最終目標と学生たちの様子

実習の最終目標は、自分たちで企画しプリントした生地を使用し製品を製作・販売することである。学生が実習で制作した作品は、今後、京都市内でポップアップを行う予定である。(本原稿を執筆中も、学生たちは、鋭意作品づくりに取り組んでいる)。自分たちの手で真白な状態から作り上げた作品が、どのように評価されるか、不安ではあろうが、作品が形になっていく喜びも感じながら作品制作に取り組むことができていると思う。

学生からの報告の中には、「近年産地が抱える問題である多品種小ロット生産において、鷲野氏が苦勞されているという側面も目の当たりにした」というものがあった。鷲野氏は、染色工程に対しても、採用する生地の品質に対しても、仕上げる商品のクオリティに対しても、職人ならではのこだわりと矜持を持ってお仕事をされている。そうした一流の職人の姿勢は、学生にとって刺激になったようである。学生自身が、今後社会人として仕事をしていくうえで、この実習経験を役立てることを期待する。

#### <注>

- 1) <https://washino-print.com/company> 2024年1月15日閲覧。
- 2) <https://journal.thebecos.com/nassen-syokunin/> 2024年1月15日閲覧。

## 【大阪キャンパス 報告③】

担当教員	藤井輝之
ゼミ生数	1名
実習先名	株式会社コモテキスタイル
実習先住所	〒530-0016 大阪府大阪市北区中崎 3-2-22 ラ・メゾンさくら 3E
実習期間	2023年6月12日～6月23日、11月1日～11月14日

### 1 担当実習先を選んだ理由

株式会社コモテキスタイルの事業内容は、バッグ用生地、付属品の販売、オリジナル生地の企画、提案、サンプル製作、量産である。有名ブランドのテキスタイル製作にも携っている。また、昇華転写プリントでは在阪の専門学校のコテストや卒業制作用のオリジナル柄プリントなどの生産に関わる。これはとくに定評のある活動である。今回は先方からオリジナルプリントに関するワークショップのお誘いがあり、本学の学生数名が参加したことを契機に、臨地実習プランが実現した。以上の点から、学生がオリジナルプリントでテキスタイルや製品を作ったり、小規模ブランドの立ち上げに関する実習ができると判断し実習先として選択した。

### 2 実習のテーマや内容

実習のテーマは、知財を生かしたブランドを立ち上げ、製品を販売することである。

実習の内容は以下の通りである。

1. 実習先を理解する。
2. リソースを活用しマーケットを決める。
3. マーケットのニーズ（何があって何が足りないのか）を深掘りする。
4. ニーズの商材を決定する。
5. 変革話法、メタファー法、反転法などのコンセプトとそのキーフレーズを作成する。
6. 5W3H（利点の言語化）。
7. 商品ビジュアルの作成。
8. 商品サンプルの製作。

9. SNS アカウントの開設（運用方法やテクニックの習得）。

10. 商品写真の撮影。

### 3 学生たちの様子

実習では、初回からビジネス立ち上げに関するアイデアの掘りおこしに取りくんだ。学生は、実習先の社長やスタッフの方とブレインストーミングを行った。その際には、アイデアを効率的に整理するため、KJ法などの手法を導入し、アイデアの深掘りを繰り返していった。その後、Chat-GPTなどのツールを活用しながら、自らのプランを何度も検証し、改善した。ブランド名の決定にも時間をかけた。思い描く商品とのつながりや、SNSとの連動性を重視しながら、多くの案をアウトプットした。

実習の過程では、試行錯誤を繰り返しながらも、産みの苦しみを克服していった。その中で学生は、何事にも時間がかかることや、常にアップデートしていくことが必要であることを実感した様子であった。製品用のイラストにも工夫を凝らし、悩みに悩んだ末に、直感を頼りにイラストを描くコツをつかんでいった。そのうえで、どのような商品を誰のためにつくるのか、という問いをつねに抱くように心がけた。そして原価率や上代設定、上代が決定した段階での売り上げを見込んだ生産量の推測など、実際に販売するためのプランを同時進行で模索していった。最終的には、袋物（ナップザック）の可愛いブランドをつくりあげることができた。本実習の過程

では、多くの学びや気づきを得ることができ貴重な経験となった。

#### 4 実習の成果

実習の成果物は、オリジナルイラストの袋物である。多数の可愛い柄をバリエーション豊かに用意することができた。購入する側とすれば、全商品を揃えて購入したくなるラインナップである。下記のリンクから各柄の詳細を確認できる。全て昇華転写プリントを利用した製品で、色鮮やかな仕上がりとなっている。2023年11月15日から行われた「あべのハルカス学園祭」での販売においても、多くのお客様から高い評価をいただいた。商品がフラットなため、中に紙を入れて膨らませてみるなどの工夫は行ったが、もう少し立体的にディスプレイし、ハイグレードな見せ方で紹介できれば、より魅力的になったと考えられる。使い方のシーン設定としては、モデルが実際に背負っている写真や動画を掲載すると、商品のサイズ感やコーディネートのかたを伝えることが出来る。物自体の品質の良さも大切だが、それを利用することでどのような幸せや喜びを感じられるシーンになるのかが重要になる。

最終的には小規模のオリジナルブランドを立ちあげることができた。海外展開（中国）も模索しており、さらなる発展を期待する。

学生の Instagram : <https://www.instagram.com/8binna3/> 2023年12月28日閲覧。



写真1 川口社長とのブレインストーミングの様子  
(2023年06月21日藤井撮影)



写真2 一部の商品  
(2023年11月17日藤井撮影)



写真3 ハルカス学園祭での商品ディスプレイ  
(2023年11月17日藤井撮影)



## 【大阪キャンパス 報告④】

担当教員	高原昌彦
ゼミ生数	2名
実習先名	株式会社ショーワ
実習先住所	岡山県倉敷市児島鞆田町 2006
実習期間	2023年6月8日～6月21日、2023年11月1日～11月14日

2023年度の高原ゼミは、岡山県倉敷市児島のデニム産地の広巾綿織物製造業、京都のプリント工場、東大阪のプリント工場の3地区に分かれて臨地実習を実施した。

本報告書では、今年度初めて、臨地実習の受け入れをご承諾いただいた株式会社ショーワ（岡山県倉敷市児島）での臨地実習状況を報告する。

今回は株式会社ショーワのほかに、児島産地にある児島産業振興センターや株式会社ITONAMIのご協力を得ることができた。そのおかげで、ゼミ生たちにとっては、より充実した実習となった。

### 1 会社概要

株式会社ショーワは1905年（明治38年）創業の、児島のデニム産地における老舗かつ最大規模の綿織物工場である。

株式会社ショーワのWEBサイトにおける企業の歴史沿革は以下のように記されている。

創業1905年の株式会社ショーワは、倉敷・児島の地で白生地機屋の時代を経て、オリジナルのテキスタイルを生産・販売し続けています。かつて児島には多くの機屋がありましたが、その数は激減してしまいました。西の地区を代表する加工を多く作り出してきた、生地の加工場も衰退の一途をたどっています。そんな厳しい状況の中でショーワが生き残ってこられたのは、あるこだわりを持って織物

を織ってきたからだと思います。ショーワの織る生地は「風合いが柔らかくて、とても良い」とお褒めの言葉をいただくことがあります。お客様からこの言葉をいただくと、今まで尽力してきた努力が、まちがいではなかったと思わせてくれます<sup>1)</sup>。

### 2 実習の内容とスケジュール

本ゼミのゼミ生2名は、株式会社ショーワを選んだ理由として、広巾綿織物製造の産地である児島地区の現状を学び、その児島産地であって、こだわりのあるオリジナルコットンテキスタイルの製造を担っている工場の現場での実習をしたいとの強い思いをあげている。

6月の実習においては、工場での染色から織り、仕上げ加工までの流れを体験した。糸を染め、糊を付け、織って最後に風合い良く仕上げるまでは、20工程にも及ぶが、その中の「ロープ染色」「整経工程」「サイジング工程」「織り工程」「ワッシャー工程」などを見学、実習した。

また11月の実習においては、児島産業振興センターのご協力のもと、株式会社ショーワのオリジナル生地を使ってどのような作品を制作するか、という課題に取りくんだ。本取りくみでは、店頭調査を実施したうえで、作品案の企画、製作にあたった。

### 3 実習の様子と成果

児島産業振興センターは倉敷市の地場産業

を多角的にサポートする施設である。児島の商工会議所の1階のスペースで平成23年4月にオープンした（岡山県倉敷市児島駅前1-37）。

本来、児島産業振興センターは、ファッションデザイナーや繊維に関する新規事業の立ちあげを目指す人たちの、起業や創業期を支援する施設である。本施設内には、工業用ミシンを使って製品づくりができるスペースや、デザイナー、事業起業人のためのワークスペースなどが備えられている。今回は株式会社ショーワのご紹介により、特別に施設の機材や空いているワークスペースを無料でご提供いただけることになった。ゼミ生たちは、その設備やワークスペースを利用して2023年11月15日から行われた「あべのハルカス学園祭」での展示販売作品の企画製作に取りくむことができた。つくりあげた作品としては、クリスマスリースやオーナメントである。作品は「あべのハルカス学園祭」でも来

場者の評判が高く、完売するに至った。

また、本ゼミは実習期間中、児島産地の繊維製品の企画販売、宿泊施設、飲食店の運営をする、株式会社ITONAMIのご協力も得ることができた。

株式会社ITONAMIは、2019年にクラウドファンディングで資金を集め、児島デニムを内装にあしらった「DENIM HOSTEL float」という宿泊施設を運営している。ゼミ生たちは、この施設に6月の2週間と11月の2週間の長期にわたり、低料金で宿泊させていただいた。また、休日のオフ・タイムには、ゼミ生たちに作品企画のアイデアを与えていただいたり、車で児島産地のご案内までしていただいたりした。

実際にご指導いただいた株式会社ショーワの工場スタッフや児島産業振興センターのセンター長、株式会社ITONAMIのスタッフの皆さまからは「自ら進んで実習する意欲が高く、周囲のスタッフとのコミュニケーション能力も高い。また、自分の意見をはっきりと言い、返事もしっかりとできる」というお褒めの言葉をいただいた。ゼミ生たちも工場や産地の状況をつぶさに見て実習できたことは、今後の進路においても役立つ貴重な経験であったと思う。

1) <http://www.showatex.co.jp/history/index.html>  
2024年1月8日閲覧。

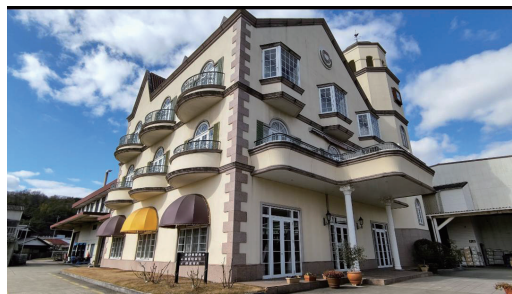


写真1 株式会社ショーワ本社屋  
(2023年6月8日高原撮影)



写真2 株式会社ショーワ工場内見学 (2023年6月8日高原撮影)



写真3 株式会社ショーワでのオリジナル生地企画打ち合わせ  
(2023年6月8日高原撮影)



写真4 児島産業振興センター (2023年11月1日高原撮影)



写真5 児島産業振興センター内見学 (2023年11月1日高原撮影)



写真6 児島産業振興センター内設備 (2023年11月1日高原撮影)



写真7 ゼミ生の製作作品  
(2023年11月15日高原撮影)

## 【大阪キャンパス 報告⑤】

担当教員	汪 奮毅
ゼミ生数	3名
実習先名	見附商工会
実習先住所	新潟県見附市
実習期間	2023年6月12日～6月21日

今回は前々職の商社時代の取引先である新潟県見附市の丸正ニットファクトリーの佐野統康社長のご仲介により見附商工会が窓口となっただけだ。おかげで、見附での「糸からセーターになるまで」という真のもののづくりの実習に3名のゼミ生が従事することができた。

### 1 会社概要

実習先は下記の3社であった。

#### 1.1 丸正ニットファクトリー

1832年創業の老舗工場、色々な感度の高いアパレル向け製品を生産、従業員103名。東京で展示会を開催するなど、積極的に販売活動を行っている。先般、縫製工場を買収し、アウトドアブランドを立ちあげたことがプレスリリースされていた。

#### 1.2 第一ニットマーケティング

1951年創業、FF30ゲージ（ドイツのシェラー社製のフルファッション機、機械上で自動的に成型が可能かつ1台で同時に同じものが8-12枚編立可能）をはじめとするハイゲージニットの生産を行う。従業員184名。すでに製造されなくなったFF30ゲージの編み機はメンテナンスしながら運用している。今回スペース増強（FFの編み機はすでに淘汰されているため壊れた機械のパーツなどを流用していたが、今回新規に発注することが出来たので編む能力が飛躍的に純増）生産をよりスムーズにするため、1年がかりでFF30ゲージの編み機を別注する。好調なファインゲージにより力を入れ、安定受注を目指

している。

#### 1.3 マックスニット

1947年創業、ゴルフ向けなどのスポーツウェア系のメンズ・レデースニット製造。従業員70名。一時期海外生産も行う。

糸→編地→企画・デザイン→サンプル作り→アパレルへのプレゼン・確認→受注という流れの前半を経験させてもらう。

### 2 実習内容

今回は上記3社にそれぞれゼミ生1名ずつを配属し実習を実施した。

いずれの会社もニット製品製造・販路拡大のための企画・開発・提案・製造・販売をこなす一貫生産能力のある工場である。ただしリンク（成型された編まれたニットのパーツを縫い合わせる特殊なセーター用マシン。棒状と丸いダイヤル状のものがある）などの労働集約的な工程は海外（ベトナム、フィリピン）からの実習生によってまかなわれている。各社とも取引先は国内の有力アパレル、セレクト・ショップ、有名デザイナーブランドなどとなっている。また閑散期の対策と今後の事業拡大のために各社とも自社ブランドを持ち、ネット通販も行い始めている。

各社とも見附市内にアンテナショップも開設している。

まずゼミ生たちは、実習初日に市内にあるアンテナショップを訪問し、見附産地の概要、各社の製品の学習を行った。自社で素材を開発したり、商工会が窓口になって海外から素材を開発輸入したりしている場合もあり、各

社のアンテナショップの訪問では、見附産地の積極性と各社が決して同じ物を作っているのではないという商品の違い・幅を認知してもらうことを目指した。この後、各社に分かれ各生産現場の見学・オリエンテーションが行われた。各社とも工場長クラスの見識あるベテランの方が臨地実習の担当をしてくださった。

今回ゼミ生全員が、ものづくりの工程の学習を希望した。そのため、企画、生産についてのレクチャーを受けた後、1枚のニット製品「セーター」が出来る仕組みを実習した。

現場にある島精機のホールガーメントなどの最新のコンピューター編み機とデザインシステムを使って、「自動機で編むデザインの仕組み」「編み機の基本的な仕組み」「編立の設計」「実際の編立工程」「縫製など後工程」「仕上げ・検品など」についてレクチャーを受け、最終的に1枚の製品を完成させるまでの過程を学習していった。

### 3 実習の成果

学生は、それぞれの顧客からのスケッチ・

生産指示書・選ばれた原料になる糸・その糸で出来た編地と、絵や平面的な資料から最終的に店頭に並んで着用できる立体的な製品へとになっていくさまざまな工程を目の当たりにして驚くとともに、糸からセーターへと形を変えていく取り組みをとおして、物が出来る喜びや達成感を実感してくれたことだろう。

貴重な時間をさいて実習をサポートしてくれた方々に感謝の念を抱いてくれたとしたらさらに嬉しい限りである。

2023年11月15日から行われた「あべのハルカス学園祭」でも本実習の成果であるニット製品を展示し、学生自らが展示品の説明を行った。この展示についても好評であった。

最後に、今回は見附商工会の御好意で現地の宿泊費については商工会・見附市・ニット組合がご負担していただきました。交通費については新潟県の補助を活用させていただきました。ここで改めて関係者の皆さまにお礼を申し上げます。

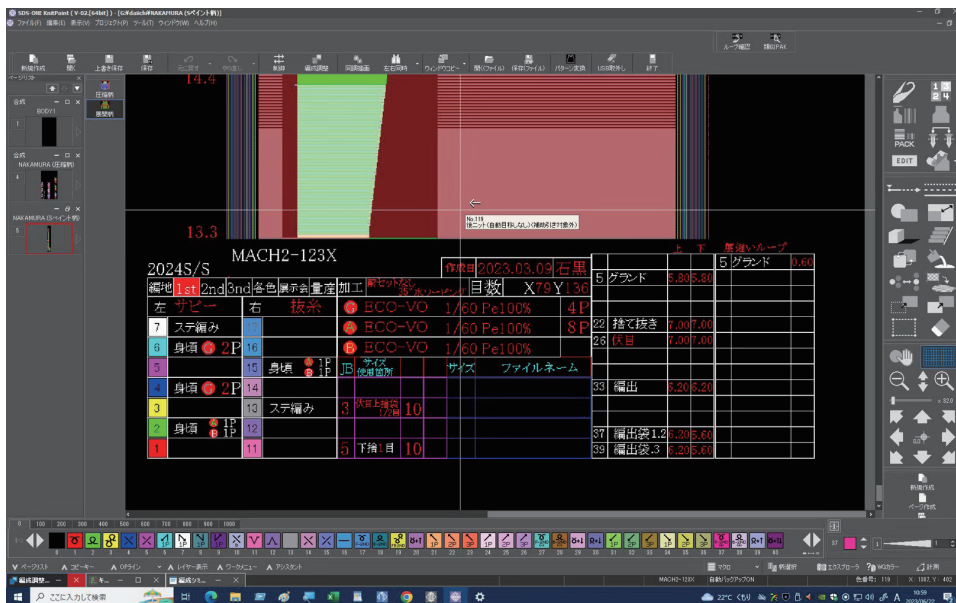


写真1 コンピューターで設計

(23年6月13日第一ニットにて中村光希撮影)



写真2 編み機から編み下がった整形済みの編地る  
(23年6月13日第一ニットにて中村光希撮影)



写真3 マックスニットの編み機  
(23年6月13日石本隆撮影)



写真4 実習での製品 (23年11月15日ハルカスにて汪撮影)



写真5 お世話になった丸正ニット会長・社長と学生 (23年6月21日丸正ニットさん撮影)

## 【大阪キャンパス 報告⑥】

担当教員	藤井輝之
ゼミ生数	3名
実習先名	有限会社 BESTPLAY
実習先住所	〒604-8156 京都市中京区山伏山町 546-2 京都芸術センター内北館 2階
実習期間	2023年6月7日～6月16日、10月30日～11月10日

### 1 担当実習先を選んだ理由

BESTPLAY社の主な事業内容は、下記の2点である。

1. スポーツ・ワーキング・イベント等のウェア、グッズの制作、加工。
2. オリジナルウェア、グッズのオーダー店舗運営 (BESTPLAY STORE)。

同社は、主にベースとなる既製品へのプリントや刺繍などの2次加工を得意としている。社内に在庫を蓄えているため、受注してから2～3日以内に加工をほどこし出荷できる受注生産型である。注文は1点から受け付けている。

同社はクリエイターの育成にも力を入れており、同社とクリエイターとの双方に利益がでるような関係形成を重視している。価格を柔軟に設定できる受注システムを取り入れており、下代は、BESTPLAYの売り上げとなり、上代から下代を差し引いた利益は全てクリエイターの収益となる<sup>1)</sup>。

若いクリエイター育成の視点を重視する同社の姿勢から、同社において本学学生が製品のプロデュースやディレクションの現場を体験する価値があると考え、実習先として協力を仰いだ。なお、本実習は、本学の連携先である大阪府商工労働部商工労働総務課大阪産業経済リサーチセンター企業リサーチグループ主任研究員小野顕弘氏からのご紹介により実現した。

### 2 実習の内容や最終目標

産地の知財・技術を活かした商品開発やプ

ロモーションのしくみや現場を知ること为目标とし、具体的には以下の4点を実施した。

1. クリエイターのプロデュース、ディレクション、取材、ネットやSNSへのアップ。
2. クリエイターとしての実習。
3. BESTPLAY × Piif Osaka オリジナル製品プランニング。
4. 販売イベントの商品開発。

### 3 学生たちの様子

実習期間のうち、前・後期3泊4日間の宿泊実習は同社が運営する「erumina コミュニティーサロン」で実習を行い、それ以外の日はオンライン(リモート)により実施した。吉田社長と担当スタッフから課された課題に対し、学生たちは主体的に取り組んだ。

前期の宿泊学習では、まず公式インスタグラムの運営についての実習に参加した。最後まで文章を読ませる投稿を企画し、また他社のインスタグラム広告に関する調査を実施した。つぎにクリエイターへのインタビューを行い、AIを利用し文字起こしをした。その文章を再度チェックしたり、紙面を構成する作業を行った。また、同社の工場を見学し、実際の製造機器を前に製品を製造する手順などを学ぶ機会を得た。オートメーション化された工程は意外に少なく大半は手作業になるが、学生は職人たちの作業のスピードの早さに感嘆の声をあげていた。

前期フィールドワークは個別に行った。実習先である京都芸術センター(旧・京都市明倫小学校)<sup>2)</sup>は、2008年7月に国の有形文

化財に登録されており（写真1）、調査を実施した。さらに漢字ミュージアム<sup>3)</sup>や京都国際漫画ミュージアム<sup>4)</sup>を訪問する学生もいた。

後期は、製品を「あべのハルカス学園祭」で販売するための準備作業を中心に行った。具体的には、ディスプレイの製品配置や什器構成などの工夫である。学生たちは、自らがプランニングし、各々の世界観を反映させた製品の仕上がりが見えてくると、制作意欲をさらに高めていったようであった。

個々のフィールドワークでは、京都市京セラ美術館と梨木神社<sup>5)</sup>を訪問した。梨木神社を訪問した理由は、Coffee Base NASHINOKI（コーヒーベースナシノキ）で「染井の水」で淹れたドリンク類を味わったからである。「染井の水」は京都三名水のひとつである。コーヒーハウスは、宮中から移築した茶室をリノベーションしたもので、自然の音に包まれた、京都の古き良き時代と新しい文化を感じる場であったようだ。

#### 4 実習の成果

Tシャツ、ハンカチ、ペンケース、ステッカー、アクリルキーホルダー、ソックス、ポーチ、色紙などで、多様なアイテムが出来上がった。ただし、フラット（平面）で小さな製品が多かったため、発表時に棚の中でどのようにディスプレイするか苦労していたようである（写真2）。どのようにすれば、製品をうまく立体的にディスプレイし、魅力的にアピールできるのか。見せ方を工夫することが、今後の課題である。

#### <注>

- 1) 同社が運営するクリエイター集積サイト「erumina」より。  
<https://erumina.jp/archives/creator> 2023年12月28日閲覧。
- 2) <https://www.kac.or.jp> 2023年12月28日閲覧。
- 3) <https://www.kanjimuseum.kyoto> 2023年12月28日閲覧。
- 4) <https://kyotomm.jp> 2023年12月28日閲覧。
- 5) <https://www.nashinoki.jp> 2023年12月28日閲覧。
- 6) <https://www.instagram.com/coffeebase.nashinoki/> 2023年12月28日閲覧。



写真1 京都芸術センター（旧京都市明倫小学校）  
（2023年6月07日藤井撮影）



写真2 ハルカス学園祭のディスプレイ  
（2023年11月17日藤井撮影）



## 【名古屋キャンパス 報告①】

担当教員（実習名）	大島 一豊
学生（人数）	29名
テーマ	有松鳴海絞、瀬戸焼、岡崎和蠟燭、きしめん、春日井サボテン、三河の反毛、四間道、尾州、名古屋コーチン、西尾市抹茶、清酒・御代櫻他
実習期間	2023年6月6日（火）～12月11日（月）



### 1 実習目的

名古屋ファッションクリエイション・ビジネス学科では、臨地実習Ⅱ（地方産地）の中で産地調査研究として実習に取り組んだ。目的は名古屋を中心とする東海・中部地域における伝統産業・地域産業を対象に学生たち自ら研究したい地域伝統産業を選択し、その歴史と変遷、現状分析と課題を導き出し、その解決の方向性を示すことにある。つまり、1年次、2年次の学びを活かす探究学習の実践機会とした。

### 2 実習の内容とスケジュール

この取り組みは2～3人でチームを組み、全11組（各テーマは上記）に分かれておこなった。最終報告書は次年度の卒業制作・企画を視野にライティングスキル強化のためA4体裁10,000字以上（図表別）とした。

まず、2023年6月6日にガイダンスを実施、最終報告発表会は12月と設定、約6ヶ月間の長期にわたる実習である。これは学生たちの主体性を重視し、他の実習（4月5月6月はオンワード、イオンリテールのビジネスプランコンテスト、7月は企業インターシップ、8月9月は海外実習等）と並行しながら、チームワークをはかるとともにスケジュール管理ができる人材へ成長させるねらいがある。ただし、全体のスケジュールは、以下のように学生たちに伝えた。

#### <前期>

6月6日産地調査研究実習ガイダンス

主旨と研究方法の説明後、チーム分け、テーマの決定、リサーチクエスチョンシート配布。実習期間中、適時、教員への相談受付など

6月23日リサーチクエスチョンシート提出  
内容：研究テーマ、研究目的、報告書の章立て、最終報告までのスケジュール表作成、役割分担

6月26日リサーチクエスチョンシート内容発表

以降、各チームは研究テーマに基づき、訪問先へのアポイント取り、取材依頼、見学・体験などの申し込みと活動スケジュール詳細を計画

7月28日中間発表

進捗状況報告と最終報告に向けたスケジュールの確認

#### <後期>

10月13日進捗報告共有会（1）

現状報告と追加ワークの確認

10月27日進捗報告共有会（2）

現状報告と追加ワークの確認

11月中に最終報告書まとめ

12月11日最終報告会

- ・産地調査研究報告書（10,000字以上）提出
- ・スライドによる口頭発表（写真1）
- ・PR動画等
- ・産地調査研究実習を通じた「気づきと学び」を発表（各人）

### 3 実習の様子と成果

最終報告では、各チームが当初設定したりサーチャクエスチョンに対して大きく2つの解決策の方向性が見受けられた。ひとつは、新しい商品提案や商品改良などモノやパッケージ等に関わる内容であり、次に、プロモーションやPR強化に関わる内容であった。

中でも岡崎和蠟燭や三河の反毛を研究したチームは、今日注目されるSDGsに着目して、具体的なパッケージデザイン案や新たな商品提案、また、春日井サボテンを研究したチームは、サボテンの栄養素に着目した料理レシピの数々が提案され、実際に調理して試食したレビューが報告された。さらに有松鳴海絞を研究したチームは、あえて「絞」だけに頼らない有松地域活性のために、新しい視点で食分野の開発とそれらをコンテンツとしたWeb制作や生成AIなど最新テクノロジーを活用した報告など、デジタルネイティブ世代ならではの視点が存分に発揮された内容であった。

さらに8月の夏休み期間に訪れた海外実習時先（マレーシア）で研究対象である地域産品のWebサイトや写真などを紹介しながら現地の人からの印象やビジネスとしての有望性など、フィールドワークで得た1次情報を取り入れ報告するチームがあった。こういった主体的な活動機会を持てたのも複数の実習を同時進行させた結果である。

今回の臨地実習Ⅱ（地方産地）における産地調査研究の成果としては、学生たちにとって身近な東海・中部地域における多くの伝統産業・地域産業を再確認することができたことにある。本実習スタート時、学生たちは意外にもその存在すら認知しておらず、何となく耳にしたことがあるという程度であった。

それが今回、探究学習に取り組むことで地域産業の歴史・文化や変遷を理解し、現地での体験、数々のフィールドワークを通じて得た知識は、これからグローバル化する社会に必ず資とする実習成果となったと考える。

加えて、最終報告会では、学生一人ひとりから実習を通じた「気づきと学び」と題して、コメント発表とミニレポートを提出させた。それらを要約すると次の2つである。まず、チームで進めることの難しさである。それぞれのスピード感も異なり、また、途中で企業インターンシップに出かけるメンバーもいることで計画通りに進まず、最悪の場合、連絡すら取れない状況が度々起こった。これらを回避するためには事前に役割分担とスケジュールを決め、書面にまとめて共有しておくことの重要性が挙げられた。

次に長期にわたる実習のため、自身でモチベーションを維持し、確実に進行できるように個人レベルまでスケジュールを落とし込む必要があるという気づきがあった。これらは、主体性そのものであり、「誰かがやってくれている。」ではなく、自覚を持ってワークそのものに責任を持ち、取り組む姿勢が必要であることを学んだ。

これらのように、ひとつのテーマに基づいて長期間にわたりチームで推進したことに大きな意味があった。実習期間中、さまざまな要因で作業が滞ることもあったが、学生たちは最終報告まで成し得た。この経験は、これからの就職活動にはもちろん、次年度の卒業制作・企画、さらにその先の社会でも役立つ学びの機会になった。これらの学びをしっかりと活かしていけるように彼らの主体性に期待したい。

## 【名古屋キャンパス 報告②】

担当教員	奥村 潔（可児直之：マレーシア引率）
ゼミ生数	29 名
実習先名	Mネイル
実習先住所	Mネイル・マレーシア店、本学名古屋キャンパス
実習期間	2023 年 8 月 16 日～ 22 日、2024 年 1 月 11 日～ 30 日

2023 年度 3 年生の臨地実習Ⅱについては、地場産業調査・研究と並行して海外実習Ⅰにおけるマレーシアでの日本企業の活動調査と絡めて、同地での日本由来の素材を使用して小物商品展開を視野にいたした活動を以下に報告する。

なお、マレーシアを訪問したのは 3 年生 29 名中 10 名であり、その調査をもとに商品の企画・開発を小グループに分かれて行った。

### 1 実習先詳細

実習先会社名：株式会社 M. prorise（通称：Mネイル）

業 容：ネイルサロン（名古屋市内 3 店舗、マレーシア 1 店舗を展開）

規 模：従業員約 20 名（マレーシア店を含む）

売 上 高 等：個人会社のため不明

受入先代表者：代表取締役 奥村 真弓 氏

### 2 実習先選択の理由

2023 年 3 月に Mネイル奥村社長より着物地提供の提案（着物地を使用した小物企画開発）を受け、異文化圏である同社のマレーシア店での販売展開可能性検討も視野に入れ、海外実習と絡めて、本計画を推進することとした。

### 3 実習スケジュール

第 1 段階：2023 年 4 月～ 7 月（計 22 コマ）

ネイルサロン・ビジネスの認識から開始。同社奥村社長、Mネイルに商材を供給する TAT 小森部長による講義。また、着物に関して非常勤講師・原絹代先生よりご指導をいただいた。

第 2 段階：2023 年 4 月～ 11 月

イスラム圏としてのマレーシアについての知識促進のために、田中雅一教授（大阪キャンパス）による講義を受講（国際連携ゼミの枠組みにて計 10 コマ）。

第 3 段階：2023 年 8 月 16 日～ 22 日

マレーシアにおける海外実習での市場調査

第 4 段階：2023 年 12 月～ 2024 年 1 月

提供された着物地を使用した小物企画・見本制作

最終段階：2024 年 1 月 30 日 着物地使用小物企画プレゼンテーション

Mネイル奥村社長を招いて企画の説明並びに見本を提示し、評価をいただいた。

### 4 実習の内容・最終目標

イスラム圏という日本人には馴染みが薄い文化圏を理解し、着物地を使用した小物をこの地において商品展開の可能性を探るという意欲的な試みに挑戦した。そのために必要な知識情報を講義などをとおして受け止め、集約し、これに資すことができた。

### 5 学生の状況（各番号表記は実習スケジュールの各段階の番号に連動）

1 ネイルサロン・ビジネスについての講義

M ネイルの創業背景並びにネイルサロン・ビジネスの在り方を理解し、ビジネスへの取り組みの姿勢に自らのこととして興味を示した。

また、ネイルサロン・ビジネスに材料を供給する側からの視点、つまり当事者の外側からの見方を学んだ。

## 2 異文化としてのイスラム圏に関する講義：

イスラム圏に関する基本知識の学習、名古屋キャンパス近辺のイスラム寺院（モスク）の訪問などを経験した。同時に異文化異宗教についての理解を促進した。

## 3 着物に関する講義

着物に馴染みのない学生たちは、着物並びに各部位の名称・着付けなどに興味深く取り組んでいた。

## 4 マレーシア訪問に関して

現地訪問により異文化の片鱗を理解し、大いに興味・好奇心をそそられたと好評であった。現地に関する情報は、10月2日の報告会にてクラスで共有した。

## 5 着物地を使用した小物企画・開発について

一部の学生は2023年末時点で見本の制作を完了し、企画書に進んでおり、1月末のプレゼンテーションのための集約に入っている。

## 6 実習の成果

### M ネイルによる講評：

講義受講学生の反応について：

小さなビジネスにもかかわらず興味を持って受講してくれたことに感謝。各種質問にはあらためて気づかされることが多く、当社にとってもためになった。

マレーシア海外実習について：

旅行という気軽さもあり打ち解けて様々な話ができ。学生諸君が将来マレーシアと関わりを持った時にこの経験を思い出してくれることを楽しみにしている。

着物地使用小物制作：2024年1月30日  
プレゼン実施

教員としての所感：

本実習は広範囲にわたっており当初学生には戸惑いもあったが興味を持って取り組み、実習成果は大いに上がったと思われる。反省事項としては、当初ヒジャブ（ムスリム女性が頭や体を覆っている布）への着物地の使用を想定したが、素材が合わないため検討がそれ以上進まず断念した。

## 7 総括

臨地実習Ⅱと海外実習Ⅰそして国際連携ゼミを絡めて非常に盛りだくさんの実習となった。ネイルサロン・ビジネスは規模的には小さいとはいえ、創業から運営に至る過程は規模の大小を問わないことに学生は気づいたと思う。また、異文化圏との交流によってニーズあるいは好みの文化的な違いは大きく悩む点もあったと思われる。

将来この種の小さな経験が国際的な状況に直面したとき生きてくると考える。



写真1：着物着付け（2023年6月14日奥村撮影）



写真2：Mネイル・マレーシア店（2023年4月22日Mネイル 奥村真弓氏撮影）



写真3：マレーシアにて現地学生との意見交換・交流会（2023年8月21日国友沢充撮影）